令和２年度　豊後大野市総合教育会議　議事録

１　開催日時

令和２年９月２９日（火）　午後３時００分開会　午後５時００分閉会

２　開催場所

豊後大野市役所（２階）中央公民館　視聴覚室

３　出席者

〇市　長　　川野　文敏
〇副市長　　石井　聖治
〇教育長　　下田　博
〇教育委員（全員出席）
　１番委員　矢野　憲一
　２番委員　羽田野　光江
　３番委員　江嶋　真朋子
　４番委員　衞藤　栄一（教育長職務代理者）

４　事務局等の出席者

市長部局（３名出席）

総務企画統括理事	赤峯　浩
総務課長	城井　達也
総務課総務係長	矢野　慎一郎

教育委員会事務局（７名出席）

教育次長	堀　誉裕
学校教育課長	内野宮　俊介
学校教育課参事兼給食調理場長	赤嶺　真一
学校教育課課長補佐兼教育総務係長	衛藤　幸司
社会教育課長	佐藤　精華
社会教育課参事兼図書館長	太田　新子
社会教育課参事兼歴史民俗資料館長	高野　弘之

５　会議及び議事の概要

（司会）矢野総務係長　資料の確認

城井総務課長　　＜開会あいさつ＞

川野市長　　＜市長あいさつ＞
新型コロナウイルスの影響を受けている子どもたちの学びについて心配している。
夏休みを短縮し、勉強する時間の確保をしてきたが、再び臨時休校という状況になった場合に備え、タブレット端末を１人１台配布する準備を進めている。
感染症対策としては、初期段階でマスク、手指消毒液、体温計等備品を配布し、さらに非接触式の蛇口への付替えやトイレの洋式化による感染拡大防止策に取り組んでいる。
併せて、保護者の皆様方には４月から８月分の５ヶ月分の給食費を無償化して経済的な支援を行っている。当面、新型コロナに付き合っていかないといけない生活が続くと考えられるので、引き続き皆様方の御理解、御支援をお願いしたい。
合併後 15 年経ち、現在、本市の最上位計画である「豊後大野市総合計画」は第２次の中間見直しをしている。まち・ひと・しごと総合計画も第２期計画の策定中で、それに伴い総合教育計画も見直しとなっているので、本日の会議では皆様方から忌憚のない御意見をいただき、計画の中に反映させていただきたい。

石井副市長　　＜副市長あいさつ＞
児童生徒への感染防止対策に力を入れて取り組んでいるところ。具体的には、感染者が市内で発生した場合、あるいは教職員、児童生徒に出た場合にどう対応するか等のシュミレーションや衛生用品、物品の調達、市の備蓄と合わせていかに共同調達でやっていくのか等、限られた予算の中で教育委員会事務局、学校現場と連携しながら取り組んでいる。
昨年、総合教育会議の中で御意見をいただいたＧＩＧＡスクール構想によるモバイル端末の調達配布について、かなり前倒しになったが国の予算を活用して３月までに通信環境、１人１台のタブレット端末の整備を進めているところ。
今後も市長部局として引き続き教育委員会事務局、学校現場と連携しながら進めていきたい。

下田教育長　　＜教育長あいさつ＞
教育委員会は独立機関であるが、市行政の進める方向と同じベクトルで取り組んでいくべきだと考えている。その方向の中で、教育予算も配慮をしていただいていることに議会も含めて感謝を申し上げたい。各委員色々な意見を持っている。話題提供をさせていただく中で今後の方向性について御意見をいただきたい。

下田教育長　　令和２年度豊後大野市教育委員会の重点施策について（説明）

(司会)矢野総務係長　＜自己紹介＞
教育長職務代理衞藤栄一委員、１番矢野憲一委員、２番羽田野光江委員、３番江嶋真朋子委員、赤峯総務企画統括理事、城井総務課長、堀教育次長、内野宮学校教育課長、赤嶺学校給食調理場長、佐藤社会教育課長、太田図書館長、高野歴史民俗資料館長、衛藤学校教育課長補佐、矢野総務係長

矢野総務係長　＜資料説明＞　～豊後大野市教育大綱について～
現行の大綱について、第３次豊後大野市総合教育計画との整合性を図りつつ、その中間見直しに合わせ、平成 31 年度から令和２年度までの２年間を対象期間としている。
「ふるさとを愛し、地域とともにシアワセな未来を拓く、たくましく、心豊かな豊後大野の人づくり」を基本理念とし、その実現に向けて教育行政を総合的に推進するための６つの基本施策、「協働によるまちづくりの推進」「学校教育の充実」「生涯学習の推進」「スポーツの振興」「文化財等の保存・継承」「人権尊重社会の実現」とそれを実行するための重点施策を定め教育行政に取り組んでいるところ。
これらの基本施策について、教育を取り巻く状況の変化や施策の進捗状況などを踏まえ必要に応じて見直しをすることとなっているので、この後の意見交換等を参考にさせていただきながら次期大綱（案）を作成し、来年２月に改めて総合教育会議を開催し、みなさまにお諮りさせていただき策定したいと考えている。
大綱は、令和元年度から引続きのものとなっているので、詳細な説明は省略とする。

内野宮学校教育課長　＜資料説明＞　～学校教育について説明～
豊後大野市教育大綱に沿って説明　大綱Ｐ２～Ｐ４

佐藤社会教育課長　＜資料説明＞　～社会教育課の取組について説明
豊後大野市教育大綱に沿って説明　大綱Ｐ４～Ｐ６

（司会）矢野総務係長　これからの意見交換については、城井総務課長が進行する。

城井総務課長　事務局の説明を踏まえ、教育行政に関する意見交換をお願いする。

堀教育次長　教育会議は自由な意見交換をする場ではあるが、意見交換の材料として教育委員会でテーマを４つ用意している
①ＧＩＧＡスクール構想に関するもの
校内通信ネットワーク整備、児童１名に１台のタブレット整備
「ＧＩＧＡスクール構想に向けた対応について」
②各町に学校を残すということで小中一貫教育校を通した「持続可能なまちづくり」

③郷土学とセットで文化的景観の価値と重要性
④市内に唯一の高校である三重総合高等学校の支援について
三重総合高校への進学生の増加を図るため、特色と魅力ある高等学校づくりへの支援について

下田教育長　　フリートーキングを提案

川野市長　　４つのテーマに拘らず委員それぞれの思いを話していただきたい

＜意見交換＞　　―ＧＩＧＡスクール構想に関するものについて―

4番衞藤委員　　昨年、タブレット導入についてお願いをしていたが、コロナウイルス対策のおかげで導入が早くなった。５年もすれば、ハードもソフトも古くなり更新が必要となると考えられるので、入ったら即、使えるように体制を整えていただきたい。
そして、最終的には各町の小中学校がICTを使うことによって交流授業ができたり、いろんなグループ学習ができるようになってもらいたい。
そのためには、ソフトウェアの管理やアプリも最新のものを提供できる仕組み、その使い方を指導できるプロの方もしくはそのICT援助員を現場に配置していただきたい。
子どもたちがタブレットを使った学習に慣れる、慣れて利用するまでに壊れることを気にせず、どんどん使っていけるような環境、つまり、学校としてもその覚悟が必要だと思っている。
どんどん使わせて、利用できるようにすることが今回のGIGAスクール構想の根底を支えることになると考えているので市長の考えをお聞かせ願いたい。

下田教育長　　他の委員さんもこのテーマについて御意見があればまとめてお願いしたい。

川野市長　　子どもさんがいる江嶋委員へタブレット導入について、いいなぁと思うところと例えばこんなところが不安だなというところ、感じられていることがないか。

３番江嶋委員　　私が教えることができないので、子どもたちが一人で使いこなせるかどうかが不安。
コロナ対策として高校生のズームでの授業が行われていたが、高校生くらいになると自分でその設定ができるのだが小学生の場合、設定やそれが故障したり、止まったりしたときにどうしたらいいのかなという不安がある。

川野市長　　衞藤委員からお話があった学校で活用していくのに、先生方が慣れていって使いこなしていけるようになること。将来的に横のつながり、横のラインで繋げていって面的な繋がりを目指していきたいという点について、学校教育課の方ではどういう使い方をしていきたいという考えがあるか？

学校教育課長　最初の段階では慣れるために家に持ち帰ってもらうというところまではいかないと考えている。
使い方としては、授業でまず一番最初に考えられるのが、例えば理科で外に何かを観察に行って、そこで子どもたちが写真を撮って「こんな生き物がいたよ」とかというようなことをみんなで共有していくとか、子どもたちがそれぞれ自分の意見をホワイトボードを使って発表していたものをテレビの画面で見ながらみんなで意見を共有するとか、そういうことが考えられる。
あと、自分の意見とか自分たちの班の意見とかをグループでいろいろな学習をして発表するときにロイノートというのがあるのですがそれを組み合わせてプレゼンみたいなものを作ったりとか、そういうところから活用を始めていこうと考えている。
もっと工夫すれば色々な使い方があると思っている。
私が今３つほど例をあげましたが現場で実際に学校に置かれているタブレットで既に先進的にやっている先生方もいらっしゃいますので、そういうものをみんなに還元しながら広げていきたいと今考えている。

下田教育長　先生の間にも得意な先生とそうでない方がいるので、ICT の検討委員会を立ち上げて、スタート時は共通して同じスタートラインに立てるようにしていこうことを教育委員会としては考えている。
そのための先生方の研修を１０月の下旬から始めて、1 人５回以上受けるようにして４月を迎えたいと考えている。
ICT に能力が高い先生が限られているので、今回、議会でお願いしているのが研修にかかる支援員。その方の力を借りてスターラインを揃えることを第一にしたいと考えている。
衞藤委員は、機械は入れたけど、ほったらかしにされるのではないかということを心配されているのではないかと思う。

川野市長　まず、子どもたちには、先生も含めて学校の中でそのタブレットを使うことに慣れていただく。
セキュリティポリシーの整備等、まだまだやっていかなくてはならないことがたくさんあるので、衞藤委員がおっしゃる横の面の広がりというものは、もう少し先のことになると考えている。
ただし、衞藤委員がおっしゃるような将来像を目指していかないといけないと思っている。

石井副市長　どんどん使用していただくにあたっては一定のソフト的な歯止めみたいなものを今後の整備していく必要があると思う。
気のなるのは、衞藤委員が冒頭おっしゃられた５年後に更新のタイミングが来るというところ。

一斉に更新となると、また１億数千万の支出が必要となるので、その対策についても今後検討が必要だと考えている。

２番羽田野委員　子どもたちがたくさん使うようになるのはたいへんうれしいことなのだが、セキュリティが心配。相当に考慮しないといけないと思う。
先ほどの５年くらいが寿命だということだが、先日、教育委員会でも話をしたが、次から次と変わっていくのにいっぺんに５年後ではなくて、毎年更新をしてくれるとありがたいと思っている。
更新というのが卒業したらその人数分を次の１年生に買っていただくということをずっと進めていただけるとありがたいと思っている。

川野市長　子どもさんの数は年々減っていく。５年間はきちんと使えるわけなので、その間は使っていただきたいと考えている。
私たちが想像するものとはまた別の世界が５年後にはあるのではないかと思う。
５年経った時に衞藤委員がおっしゃるような使われ方が本当に広がっているのかどうかというところを含めて、その時に委員のみなさんと一緒に、どうやっていくのかというところを考えてく必要があると思う。
矢野委員の意見はいかがか。

１番矢野委員　私の仕事は登記業務なので法務局との繋がりの中で仕事をおこなっている。
１０数年前からオンラインでやっているが、配置を始める前はやはり、こういう議論があった。
その時に、何年後にどうなるのかはやってみないとわからないじゃないか、何年後かに多分機械も更新されるだろうし、ソフトも更新されていく、段々便利になっていくことは確かだろうからやってみて、それからみんなでまたやり方を考えよう。いずれそういう社会になるのだからという話があった。

川野市長　今、時代は 4G から 5G、そして 6G とかいう話ももう出てきている。
いずれにせよ、私たちがそれに順応していかざるを得ないというところ。
この点どう考えるか。

４番衞藤委員　僕らが知らない間に IT が ICT になっている。そして、情報化社会という言葉も捨てられようとしている。
今までは情報を入力してその情報を探して自分の中で噛み砕いて、自分で利用していくというものだったが、今は、知りたいことに対して AI が先を読んで答えを用意、提案してくれる。そういう、世界がもう目の前に来ている。
そういう時代に対応できるような使い方ができるようにどんどん推進して欲しい。

２番羽田野委員　タブレットを使用、利用できるようになるためにはやはり指導者が必要だと思う。
そのためには、先ほど教育長が先生に研修をおこなっていくということを言われたが、得手不得手があると思うので、そこに差がでないように、ぜひとも、支援員を大量に導入していただきたい。

川野市長　そのために、今年度支援員をいれている。その成果等を見ながら令和３年度以降の進め方を考えていきたいと思う。

４番衞藤委員　この事業に３億かかっている。どんどん使う方向にもっていかないと、３億が２億５千万の価値になったり、１億になったり、３千万の価値になりかねないなと思っている。だからどんどん使うことが活きる道だと思っているのでお願いしたい。

川野市長　時代はＤＸの時代に向いている。国もデジタル庁を新設してそういう社会をにらんだ政府の機関のあり方もこれから変わっていこうとしている。
当然、私共もそれに遅れることのないようにしっかりと仕事の中で使いこなせるように、子どもたちにどんな使い方ができるのかというところは教育委員会を含めてやっていかなきゃならないと思う。

下田教育長　タブレットの活用について、みなさまからたくさんの御意見をいただいた。
教育委員会としてこのＧＩＧＡを活用した学校教育のあり方ということをきちんと打ち出せるように考えていきたい。

川野市長　総合教育計画、計画の中の柱立ての中には入っているか。

堀次長　入っている。

川野市長　そこでしっかり記述し、この取組を進めていくということを計画の中にも位置づけていきたい。

＜意見交換＞　―小中一貫教育校を通した「持続可能なまちづくり」―
１番矢野委員　学校教育というのは本当に重要なことだが地域の活性化のためにも学校は町単位に残すことがやはりいいことではないかと思っている。
最近では、昨今、大きな災害もある、学校というのは防災の拠点にもなるだろうし、地域の方々の心の拠り所になるところも大きいと思う。
持続可能なまちづくりのために、児童数だけで学校の統廃合を考えるのではなくて、そういう観点からも考えていただくことも非常に大事だと思う。
そこで、市長に学校の統廃合をしないということを公約にあげてもらいたい。
先日、私の住んでいる地域の方から最近学校との接点が少なくなってきたなという言

葉を聞いた。この言葉を聞いたときに、コミュニティスクールっていう考え方は学校運営協議会やPTAの一部の方でしか認識できてない言葉なのかな？一般の市民にはこうまだ馴染みのない浸透していない言葉なのかな？ということを感じた。
特に私は三重の学校運営協議会に年数回出るが三重町の場合、五つの小学校があり、五つの学校、五つの地域という感覚を持っている。
一方、中学校単位とになると広がりすぎて、みんなが認識していないと感じている。
そこで、市長が筆頭となって、豊後大野市はコミュニティスクールに凄く力を入れてるんだということを強く市民に訴えていただきたい。
そうすることで市民全体に学校があることの意義について改めて考える機会を与えることができると思うし、学校に関心が高まることで校舎等の環境、改善等について市民の方から声が上がってくるのではないかと考えている。
さらには、市民にコミュニティスクールという考え方が浸透することによって、空き家バンクとかそういうまちづくり等の事業とあわせれば子供が安全安心で暮らせるまち、豊後大野市を外部にアピールすることができて、定住促進のきっかけにもなるのではないかと思っているが市長はどのように考えているか。

川野市長　テーマが小中一貫校という観点からいうと、学校が地域の振興を担っていくということだと考えている。先日、三重町の新田地区の方から市に対する要望があった。
その中でもちろんその新田小学校っていうところを守っていくためというとこがあると思うが、そのためにも新田幼稚園を人数が少なくても開園して欲しい、住宅の政策として子どもの数、児童数を確保するために向田住宅が今、非常に老朽化しているので新しくなれば若い人が入りやすくなるから住宅を建て替えてほしい、道路の環境を良くしてほしいという要望があった。
そういうことが、学校に通いやすくするとか、学校の子どもを確保していくとかいう政策に繋がっていくので、地域の皆様方というのはそういう思いが非常にどこの地域にでも強いのだと思っている。
三重の白山の久部小学校が閉校になったときに地元の皆さんが地域から子どもの声が聞こえなくなるっていうところを非常に心配されており、やはり学校がなくなると地域が本当に沈んでいってしまうという現状が本当にまざまざと体感した。学校があるということは地域にとって非常に大事なことなのだろうなと思っている。
先ほど、学校の統廃合はしないという公約を出してもらいたいという御意見をいただいたが、それに対する回答をイコールではないが小中一貫校というのは、中一ギャップ、これを解消するために子どもたちの学びを着実につけていくための手段としてやろうとしている。
子どもの数が少なくなるので廃校にしないために小中で一貫やったら残っていくのではないかという考え方もあるとは思うが、そこは少し違うと思っている。
やはり、地域には地域の学校があってそこで子どもたちが小学校から中学校、今度は6-3制じゃなくて4-3-2制に移行して学力をきちんと定着させていくっていう取組を

やっていこうとしている。
そのことがひいては地域に学校が残るということに繋がっていけば、ありがたいことだと思っている。
来年から朝地でやろうとしているが、千歳、清川も順次、小中一貫校の方に移行の取組を進めていって地域に根ざした学校づくりをやりたい。
以前はＰＴＡ活動や祖父母学級が盛んで、地域の皆さんで学校がお祭りの場になったりしていた時代もあったが、最近少しずつそういう繋がりや結びつきが弱くなってきている状況があると思うので、改めてコミュニティスクールということで学校が拠点となって地域づくりを支えるっていうような位置づけもある意味必要なのだと思っている。
この小中一貫校について、教育委員の皆様の考えや感想を聞かせてもらいたい。

４番衞藤委員　学校っていうのは地域の光だと思う。だから、ぜひとも地域に残してほしい。
さらに小中一貫校を残すためにも横の繋がりを広げていけるようにしてほしい。

川野市長　清川は小学校中学校隣り合わせなので、そういう連携をするのもやり易い環境にある。
大野、犬飼も同様にすぐに一貫やろうとしてもこうできる環境にある。
その辺の考えはどうか。

２番羽田野委員　最初に小中一貫校ということを聞いた時にね、「えっ」と思った。知り合いの保護者の方もそういう説明があったが大変不安だということだった。
しかし、教育委員会に出席をして、色んな話を聞いた時にこれはいいことだと思った。
犬飼町の小中で、どんコミティネットというのがあり、そこで出席者の方々に「豊後大野市は小中一貫で 4-3-2 制を推進している。私はおおいに賛成だ」ということをお話させていただいた。
明治以来ずっと続いてきたこの義務教育 6-3 制を壊しても子どもたちの成長は著しいものがあるし、そういうことでやっていくことは素晴らしいことじゃないかなと思っている。
先ほどの衞藤委員の話を聞き、私も犬飼の長谷小学校の卒業生だが、長谷小学校がなくなるときに、たいへん寂しい思いをした。これは残さんといけんという声を高らかに言ったがよそから来ているお嫁さんは、「こんな小さな小規模学校でどうするん？早く犬飼小学校に統合しようや」と言われた覚えがある。
今考えると犬飼中学校に長谷の子どもたちがバスやら自転車で通っている現状をみると良かったのではないかと思うようになり、世の中の流れで小中一貫校となることも同様にそう思えるようになるのではないかと思っている。

川野市長　江嶋委員に子どもさんの視点から、4-3-2 制、小中一貫校についてお聞きしたい。

３番江嶋委員　子どもたちが中一になるときに急に勉強が難しくなるので、その中一ギャップのが解消できるという話を聞いたときにはすごくいい話だなと思った。
ただ、他の保護者の方に聞くと小学校には小学校のいい雰囲気があるのが、中学校と一緒になることでその雰囲気が壊れるのではないかという不安があるという保護者の方がいて、色々な意見があると思った。

川野市長　教育委員会としてはどう考えているか。

下田教育長　豊後大野市がこれから進めていく学校教育の考え方として児童生徒数が減るという課題が一番の背景としてある。
この時の選択の一つとして、学校を集約して子どもたちを元気に、活性化するという道筋がある。
一方、七つのまちが一つになって豊後大野市を形成していく中での、もう一つの選択として、集約するよりも今ある学校を大事にすることの方が今後、未来永劫、豊後大野市が持続可能なまちづくりをする上では、正しい選択なのではないかと教育委員会としては思っている。
だから、子どもたちがいずれ豊後大野市に帰ってくるための教育というものを手厚くやるために郷土学やキャリア教育について徹底的に取り組み、将来、子どもたち自身の選択でふるさとに帰ってくるということを目標に０歳児から地元の地域の人たちと一緒に育てていくという、道筋の一つが小中一貫校だと認識している。

川野市長　平成 17 年に合併して、15 年経ったが、やはり一つの村、町の個性って一つになったからといってそれが薄らいでいくものではなく、個性はそれぞれ光っている。
その個性を大事にしながら、まちづくりをやっていくという方向性だろうと思う。
だから、それを支える地域、やはり学校が拠点となっていくというところが大事だと思うので学校を一つに集めるのではなくて地域の個性を活かしていくためにも学校はそれぞれ七つにあって、それぞれの個性が育っていって一つの豊後大野市のまちづくりを進めていくという形が一番いいと思うので学校は残していくべきだと考える。

石井副市長　人口減少、高齢化が進んでいくが、やはり、人が減らない若しくは先ほど教育長から話があったＵターンしてもらうための施策とかを我々が頑張ってやっていく必要がある。
国も、東京、首都圏、あるいは都市１極集中、やはり政策的におかしかったのではないかというような意見もあり、本市のような地域が住みやすいと思う方がたくさん出てくると思う。
そのような中で、郷土を愛する気持ちというのがあればまたこちらに戻ってくると思うし、人口も少なくなるという前提じゃなくて、そこをいかに食い止めるか、あるいは逆に増やしていくのかっていうところも併せてやっていかないといけないと感じた。

＜意見交換＞　　―郷土学とセットで文化的景観の価値と重要性―

２番羽田野委員　私どもの豊後大野市は、清流と緑豊かな田園都市ということで、季節ごとに移り変わる景色が心を癒してくれる。
私はいつも「私が住んでいるところは田舎よ」っていう話をするのだが、それは決して卑下ではなく自慢げに「田舎よ」という話をさせていただいている。
現在、文化的景観大野川流域の景観保護推進事業として昨年 10 月、豊後大野市景観条例及び豊後大野市景観計画が制定、施行された。
特に緒方盆地、文化的景観が景観計画の中で定められて大野川流域の文化的景観の国指定を目指している。
令和 4 年に申請を出すということを伺っているが、これが市全体の動きになっていないような、市民のみなさんに周知されていないような気がする。
今後、市としてどのように考えていてどのような取組をするのかを聞きたい。
小中学校では各学校ともにジオ学習に取り組まされて学校教育の方針の一つである郷土学を推進してふるさとおおのを愛する子どもたちの教育に頑張っているが、先ほど申し上げた文化的景観、緒方盆地文化的景観の登録の取組はもとより、各小中学校で子どもたちが選択する一番地元の一番良いスポットを市の取組として検討できないかなと考えている。
昨年、清川中学校の子供たちが市の素晴らしさをアピールするために作った版画を拝見せていただき、たいへん感動した。
こういうことを子どもたちが皆さんに周知、知らせるのはとてもいいことだと思ったのだが、これが各学校でも同様の取組がされ、市民の皆さんはもちろんのこと豊後大野市を内外に知らしめる自分たちの地域を誇れる取組ができたらなと思う。
特に、豊後大野市は神楽、獅子舞など芸能活動が盛んな地域ではあるが、昔はもう少し活発にやっていたようにあるが徐々にこう衰退していると感じている。
それで、交流や発表の機会を作っていただきたいと考えている。
子どもたちの郷土芸能には大人の力は不可欠であるので大人と子どもの関わりの中で社会教育が推進されていると考えているがこういった活動に市としてプッシュをしてほしい、将来のまちづくりにたいへん効果があると思う。
豊後大野市に生まれ育った子どもたちが将来に渡り、おらが村の自慢ということで語り受け継ぐ豊後大野市づくりの教育ができる投資をぜひともお願いしたい。

川野市長　　羽田野委員のおっしゃるとおり景観条例、景観計画を策定した。
議会に説明した際に、もう国のほうの取組が進んで何でいまさら景観条例なんだという質問があったが、豊後大野市がジオパークの活動、エコパークの活動の結果、景観に対する考え方が市民の皆さんに広がってきたので、今が景観条例の制定の時期だと、そういう期が熟したのだという話で条例を制定したという経過がある。
子どもたちは景観を、ジオパーク含め豊後大野市には、宝がいっぱいだと言ってくれ

る。ジオ学習の効果、本当にうれしいことだと思う。
ただ、一方で今、総合計画の見直しをやっている中で市民の皆さんから意見が出ているのだが、その中に豊後大野市は何もない、遊ぶとこがない、そんな意見もあり少し残念だなと思っている。
やはり、私たちが取り組んでいるジオパーク、エコパークの活動、それから景観条例、景観計画、そしてこれから取組を進めている文化的景観、これの国の指定等、やっていって、やはり豊後大野市は景観が素晴らしい所だということで市民の皆さんの認識が引き出せたらなと思っている。
せっかく景観条例を作ったので、「あなたが選ぶ豊後大野市の景観 10 選」とか写真コンテスト等をやりながら市民のみなさんに豊後大野市の持つ景観の素晴らしさをアピールしていければなと思い計画をしている。
一方、子どもの神楽あたりが少し下火じゃないかという話だが、私が社会福祉課長の時にふるさとまつりで子ども神楽の発表の場を持つようにしたが、今もやっているか。

社会教育課長　今年はふるさとまつり中止になったが毎年やっている。

川野市長　そういう活動を絶やさないようにしながら子どもの伝統の文化を継承していけるような取組を進めていくべきと思っている。
この点に関して委員の皆さんはどう思っているか。

４番衞藤委員　今、色々な旅行スタイルがあり、海外では、農村滞在型でというのが徐々に広がりつつある。そこで一緒に植付をし、また収穫時期に現れて収穫をするというのがある。緒方平野の水路のあるいい景色は、地元の人にとっては価値の無いものだそうだがジオパークの先生とお話した時に地元の方は自分の良さが何も分かっていない、それが無料の環境資源になるのにと言われていた。
あの景色は素晴らしいものだと思う。その辺の石ころの名前を言える小学生が豊後大野市にはいっぱいいる。子どもたちと話していると溶結凝灰岩って名前がポロッと出る。それだけでありがたいなと思う。
そのありがたさが、まだ地域の方には伝わっていないのかなと感じる。
郷土学なり地域なり、ふるさと学習を進めた結果、これ何？と聞くと 4 年生くらいの男の子とか女の子とかが代わる代わる説明してくれる。それだけ郷土学というものが根付き始めているのでぜひともセットで文化的景観の取組も進めていただきたいと思う。

２番羽田野委員　杵築にインバウンドの仕事をされている方がいらっしゃる。その方が呼び寄せる外国の方は 1 泊 5 万円でも皆さん来るとのこと。何をするのかを聞いたところ、杵築から国東まで毎日歩いて、泊まるのはお寺、ただ歩いて景色を眺めることがインバウンドの企画なのだとのこと。豊後大野市にぴったりだなと感じた。本市は、観光地としては成

り立たないと思っていたがその話を聞くとなるほどと感じた。豊後大野市でもそういうことに取り組めたら、子どもたちも巻き込んで郷土学というようなことになるのではないかと思い、ぜひそういう機会が持てたらいいと感じた。

川野市長　豊後大野市でも農家民泊されている方もいるし、また農業をテーマに長谷の方では田植えから刈取りの体験までを大分や福岡の方に来てもらって一緒にやる関係人口というような広がりも増えている状況があるので、そのような取組も広がっていければなと思う。
江嶋委員、子どもさんはジオパークとか、そういう学習を何かやって何かお母さんにお話とかされることがあるか。

３番江嶋委員　長い連休の休みにコロナで出かけられなかったので、家にパソコンとか本があるのなら豊後大野市の歴史的建造物を自分で調べてみてくださいと子どもが先生から言われた。本人は朝地町の真崖仏を調べたいとのことだったので一緒に勉強させてもらった。学校がそうやって働きかけてくれたことで、私も初めて見ることとなり、凄く大きいことに驚き、子どもとそういった話をする場が持てたことが良かったと思った。

川野市長　子どもさんのジオパーク学習がご家庭でこうやって保護者の方に広がっていくという効果がある。そういう面では今度、図書館、資料館ができて豊後大野市の歴史を学習できる施設ができあがるのでぜひとも活用していきながら豊後大野市のいいところ、それから、これからやろうとしている文化的景観の指定に向けて、市民の皆さんの力を貸していただきたいと思っている。

２番羽田野委員　先般、一般質問の際に、市長が観光協会の復活ということをお話された。ぜひとも観光協会の復活をお願いしたいと思っている。何故かと言う、犬飼町の観光ガイド「どんこの会」に所属しているが、観光協会がなくなる前は小学校の子どもたちに犬飼町の犬飼港や水路、蒲鉾石なんかの話をする機会があったが、今では、その機会がなくなってしまった。どんこの会は細々と続いているが何も現在活動していない。
さらに、よその町の観光ガイドの人の横の繋がりとかもあったが観光協会がなくなったことによって、その横の繋がりもなくなってしまった。今後を考えると何か核になるものが欲しいと思うので、ぜひとも観光協会を復活させていただいき横の繋がりで、子ども達に我が町の歴史を語る会にしたいと考えているので、何か違う方法でも構わないのでお願いしたい。

川野市長　観光協会を発展的に解消していきましょうということで里の旅公社ができたのだが、設立の当初から市からの補助金は５年間だけ、その後は自主財源で賄える団体になることということだった。もう５年を過ぎたので里の旅公社に対する市からの補助金については、これから段階的に縮減をさせていただくこととなっている。

ただ、観光に関しては羽田野委員がおっしゃるような活動を今、していない。
だから、歴史という切り口であれば、資料館が新しくできるので、そこが歴史に関する拠点施設になるのでそこを活用することや、あとは豊後大野市のジオパーク、ジオガイドの会とかジオパーク推進協議会とかいう団体もあるのでそういうところとの連携もありうると思っている。里の旅公社がアンテナを広げてネットワークを作ってくれることが一番いいのだが、なかなかそこが期待出来ない現状なので何か違う方策がないかと考えている。

２番羽田野委員　ぜひとも何かの方法を考えていただきたい。豊後大野市は観光協会だけではなく、九州とも繋がりもあり、ガイドの研修があった。
1 年に 1 回、マイクロバスを協会が出して私どもガイドを研修に連れて行き勉強をさせてくれていた。私どもの会長である安藤恒美先生から先日「どんこの会」はまだ残っていると言われ「どういう風に残ってるんですか？」と聞くと「県に登録をしている」と言われたのだが、それ以来全く活動がない状況で学校からも声がかかってこない。せっかくある犬飼町の歴史、風景や場所等を子どもたちに伝達する機会がないなと郷土学を犬飼のまちだけでも伝えたいと思うので、ぜひとも何かの方法を考えていただきたいと思っている。

川野市長　その団体でやりたいことがあって、例えば「補助金があればこういう活動ができるのに・・・」ということであれば、市民提案型協働のまちづくり事業の補助金を活用するという方法がある。こういうことやりたいという企画書を作成し申請していただければ、もちろん厳しい審査はあるが、認められれば活動をお手伝いできる。その「どんこの会」自体が何をやりたいのか、観光の方なのか？それとも歴史を多くの皆さんに知っていただくような啓発の活動をやりたいのか？その活動内容に応じて資料館や文化財係、ジオパーク推進係、観光係等がお手伝いできることがあれば、市役所内で一緒に考えていきたい。

２番羽田野委員　会長に申し上げて善処したいと思う。

＜意見交換＞　―市内に唯一の高校である三重総合高等学校の支援について―
三重総合高校への進学生の増加を図るため、特色と魅力ある高等学校づくりへの支援について

３番江嶋委員　市内唯一の高校である三重総合高校だが、ここ 3 年連続定員が割れている状況。
来年度の募集人員も 160 から 140 ということで 20 名減っている。
このままだと市から学校が消えてしまうのではないかと心配をしている。
大野町にも大野高校というものがあった。大野高校が無くなったから町が寂しくなった訳ではないと思うが、私が小さかった頃に比べての今とはあまりにも変わってはしまっている。

それと同じような感じで市が変わってしまうようになってしまうのはここずっと子どもを育てている親としてはとても心配だし、市内の中に高校が無くなるということで子どもたちに学ぶ意欲が無くなるんではないかと思うし、あと高校生が周りにいないと子どもたちも未来への想像ができないのではないかという心配もあるので、ぜひ魅力ある高校づくりに支援をお願いしたい。
一保護者として思うのは、給食を始めてはどうかと考えている。
お盆とお正月以外はずっとお弁当を作り続けているという毎日なので、給食や、もしくは学食があると保護者としてはありがたいなと思う。

～関係資料配布～

下田教育長　豊後大野市は中学生が 50 名減っている。
県下でも 200 人近く減っているので、各大分県全体でそれぐらい定員を減らさなければいけない実状の中で、豊肥地区、三重総合がダメだということでなくて地域性か定員を減らさざるを得ないという状況になっているという理由がある。
県教委としては今三重総合がダメだからということで三重総合の定員を減らしたという認識はない。
学級は減らず 40 人学級が 35 人学級になったという認識。今後、色々な取組で保護者がもっと理解していただけるとありがたいと思っている。

川野市長　教育長の勧めで私が市長に就任したその年から毎年、豊後大野市の三重総合高校明日を拓く会の名義で県（工藤教育長）に対する要望活動を行っている。
それが実を結び、定員は下がったが 4 クラスの編成が維持されている。
また、以前の農業高校には土木系のコースがあり、県内の土木技術者を輩出するという役割をしていた。今、三重総合高校にそういう機能が無くなっているので、できればそういう測量等の技術を資格取得できるそういうカリキュラムを組んでもらえるようにこれも毎年、要望に行っていた結果、今年度の２年生からそのカリキュラムを組んでもらえるようになった。
教育長が提案してくれた要望活動が実を結んで県の教育委員会の方も三重総合高校を大事に市の要請に応えながらやっていこうということで考えてくれている。
市内唯一の高校なのでここを魅力ある学校にしていこうと三重総合高校明日を拓く会をやりながら総合高校の学力の向上、スポーツ活動、文化活動等の個性を伸ばしていただきながら多くのみなさんが総合高校に行きたいと思ってもらえるような魅力ある高校づくりを一緒にやっていきたいと思っている。
給食ができるかってどうかというところは私どもの市立でない守備範囲外のところなので手の出しようが無い。
部活動をやっている子どもさん方で以前、寮を作ってくれないかというお話をいただいたこともあるがなかなか高校ではそういうことができないということだった。

その部活やってる子どもさん方の食事を三国屋さんが作って支えているという実状もあるようなのでそういう民間の力もお借りしながら、子どもさんの食事の方を賄えたらなと考えている。
教育長、具体的に給食、学食についての話が三重総合高校からあったことがあるか。

下田教育長　今までそういう話はなかったので市長とも話したことがない。しかし、地域で支えるまたは市全体で三重総合高校を守り育てていくというひとつの話題提供として、学校と話してみる価値があるのかなと思いながら今、話を聞いていた。

川野市長　どこが設立した学校なのか、市立なのか県立なのかというところがある。
旧三重町の時代は今のように厳格ではなかったので、市内にある幼稚園で給食を提供出来ないのはどうなのかということで話し合いが行われ、私立のどんぐり幼稚園に給食を提供していた時代がある。
この件については色々と課題があると予想されるのでかなり研究が必要だと思う。

４番衞藤委員　少し厳しい言い方をすると子どもたちから選ばれる高校になって欲しいと思う。
将来的にちゃんときちんと卒業ができて自分の選べる大学なり職業に就けるという未来を描けない高校には絶対に行かないと思う。
今、豊後大野市の子達は竹田や大分に進学しているというのが現状。
自分たちの時代には三重高校、農業高校、緒方工業、大野高校があり、自分で選んで進学していた。子どもたちから色々と話を聞くと、今は親が豊後大野市には三重総合高校しかないからそこに行けと言われたという意見が多かった。
選んでいく子達は市外に行っているような、今、現状そんな気がする。

川野市長　市内の中学生は何故大分や竹田を選んでいく傾向があるのだろうか。

下田教育長　漠然とした夢の中で有名進学校に合格したいという理由や夢が実現されるとかではなくて、ぼんやりしているがために普通科を選択するという理由が考えられる。
次に専門学科を志望される方には、きちんと就職の方向がある大分工業、大分商業、情報科学等の出口がしっかりしてるという考え方がある。
先ほど衞藤委員がおっしゃったように、三重総合高校が特色として明確でないために中学生やその保護者の選択からどうしても優先順位として下がってしまっていると分析している。
しかし、三重総合高校にも地元の高校であるが故の利点がある。朝ゆっくりできる、明るいうちに帰れる距離にあるため、部活動も思いっきりできる、保護者が迎えに行くにしても、送り迎えができる範囲にある等の色々な利点がある。就職についても市内の就職先で 100％の子が総合学科で就職しているという事実を中学生やその保護者に伝えていくという責任があると考えている。

進学についても、個々の伸びの状態をみると凄く伸びている。
決して三重総合高校に行ったら学力が落ちるということではなく、むしろ丁寧な指導により、入学時よりもはるかにレベルが高い大学受験ができるという事実があるが、そういう情報が伝わっておらず、どうしても過去の高校の姿で選択肢を狭めているような傾向があるのではないかと感じている。
今、三重総合高校に魅力づくりということで、中高はもちろんですが小高の連携にも力を入れ、小学生の時からキャリア教育の一環として総合高校を見ていただく、そういう取組もしながら、学校の素晴らしさを認識していただく、それを児童生徒だけでなく保護者にもその姿をもう少し認識していただく、そういう取組を魅力ある学校づくりの一貫として進めている。

川野市長　小学校の頃から三重総合高校を意識した取組も今年から行っているということでもあり、もちろん学力の向上についても学校のレベルをあげることについて、明日を拓く会の補助金を活用して、様々な分野の講師を呼んでの勉強や、合宿等の費用に使ってもらっている。そういう後押しをしている。来年は定員が 35 人になるということで、試練の年だと考えている。ここで踏ん張って定員割れを起こさないようにしっかりと支え、送り出していくという体制が今求められているので踏ん張りどころだと思っている。
私たちもしっかり頑張っていきたいと思っている。

１番矢野委員　私も三重総合高校の明日を開く会を副会長という立場をいただいている。卒業生がこういう３年間を過ごしたというパンフレットがあるが、生の声がいっぱい書かれており、学校を知ってもらうためには大変良いものだと思っている。それを豊後大野市の小学生から中学生全部の家庭に配るようなこともやってみたらよいのではないかと思う。

川野市長　そういう活用をしているのか。

下田教育長　中学校には届いているが、各家庭には届いていない。確かにおっしゃるとおり、そういう活用方法を三重総合高校と検討してみたい。

川野市長　パンフレットという媒体もあるが、今、三重総合高校にお願いしているのは、ケーブルテレビを活用して欲しいということ。ケーブルに出演していただき高校生こんなに頑張っているんだという姿を見せて欲しいと・・・。
学校もやろうとしてくれたが、残念ながら今年は新型コロナウイルスの影響でイベント等が実施できないという状況。
ケーブルテレビの番組自体も「あの日あの時」的なものをやらないといけないような、状況があって今年は凄く苦戦していますけれども、そういう色んな媒体を使って三重総合高校をアピールしていき市民のみなさんに総合高校の素晴らしさを認識していただけるような取組をこれからやっていきたいと思っている。

＜意見交換終了＞
城井総務課長　　意見は出尽くしていないと思うが、ここで意見交換を終了する。

（司会）矢野総務係長　閉会のあいさつ

城井総務課長　　＜閉会のあいさつ＞